

デジタル・情報活用能力を測定する CBT (P プラス) の評価

北澤 武

東京学芸大学／教育テスト研究センター

本研究は、中学生と高校生のデジタル・情報活用能力を測定する CBT「P プラス (株式会社ベネッセコーポレーション)」を開発し、大学生を対象に、これを用いた評価を行った。P プラスは、情報モラル・セキュリティ、情報デザイン、コンピューティング、データサイエンスの4領域で構成されており、中学生を対象とした「コア (82 問, 85 分)」と高校生を対象とした「ベーシック (83 問, 90 分)」の2つが開発された。大学生 60 名の内、文系の学生 30 名 (男性 12 名, 女性 18 名) が「コア」に解答し、残りの 30 名 (文系男性 9 名, 文系女性 10 名, 理系男性 8 名, 理系女性 3 名) が「ベーシック」に解答した。質問紙調査の結果、本調査の問題は難しかったと回答した割合と、「本調査の問題は、今後の社会で活躍するうえで、必要な知識を問うていると思うか」の質問に対して肯定的な回答が有意に多いことが分かった。高校生版の P プラスの正答率に着目した結果、プログラミングに関する問題は文系よりも理系の方が、有意に正答率が高いことが明らかになった。

キーワード : CBT (Computer Based Testing), デジタル・情報活用能力, プログラミング

参考文献

北澤武, 牧野直道, 菅崎直子, 岡本和之, 白戸大士, 宮和樹, 海瀬真歩, 松尾春來 (2020) デジタル・情報活用能力を測定する CBT の開発と評価. A I 時代の教育論文誌, Vol. 2, pp. 19-24